

令和8年版 シラバス作成の手引き

岩手大学 教学マネジメントセンター

※令和7年版からの主な変更・追記箇所を赤字にしています。

内容

1 シラバスの意義と役割 [p.1]

- (1) シラバス作成の法令上の根拠
- (2) 学生に対して
- (3) 教職員に対して
- (4) 社会に対して

2 シラバス登録の際の諸注意 [p.2-3]

- (1) 「授業で説明する」は不適切
- (2) 各種ガイドラインの確認
- (3) アイアシスタントの利用
- (4) **他のシラバスの再利用方法**

3 各項目の解説と記入の仕方 [p.4-13]

Step1 [p.4-5]

- | | |
|-------------------|---------------------------|
| (1) 主な対象学生 | (13) 授業外学修（予習・復習・課題等）への指示 |
| (2) 主な使用言語 | (14) 評価方法・割合・評価の観点 |
| (3) 履修上の条件 | (15) 評価の基準 |
| (4) 担当教員情報 | (16) 評価に関する備考 |
| (5) 他の担当教員名 | (17) 履修における留意点 |
| (6) キーワード | (18) 教科書／教材や参考書の指定 |

Step2 [p.6-11]

- (7) 「学位授与の方針」との関係
- (8) **授業の目的**
- (9) 到達目標
- (10) **授業の概要**
- (11) 実務経験の有無と授業内容への反映
- (12) 授業の形式

Step3 [p.12-13]

- (19) **詳細計画（授業内容）**
- (20) 詳細計画（授業外学修（予習・復習・課題等）への指示）
- (21) **詳細計画（備考）**

付録 A シラバスの仕様に関する前年からの変更点 [p.14]

付録 B 充実したシラバスの例 [p.14-22]

1 シラバスの意義と役割

(1) シラバス作成の法令上の根拠

授業担当者にはシラバスの作成が求められます。大学設置基準には、以下の通り、事前に年間の授業計画および成績評価の基準等を明示することが定められています。

大学設置基準（成績評価基準等の明示等）

第 25 条の 2 大学は、学生に対して、授業の方法及び内容並びに一年間の授業の計画をあらかじめ明示するものとする。

2 大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする。

(2) 学生に対して

学生はシラバスを確認することで、その授業科目を履修することの意味や重要性を始め、具体的な学修目標、成績評価の方法や基準、教科書や参考書、履修の際の留意点などを事前に知ることができます。また、授業外学修を含む具体的な授業内容を把握することで、履修科目の選択を含め、各学期あるいは年間の学修計画を立てることができます。実際に令和 4 年度前期教養教育科目の授業アンケートでは、学問知科目において 3 割を超える学生が、その授業を履修した動機として「シラバスを読んで興味を持ったから」を選択しています。

(3) 教職員に対して

シラバスは教職員間で教育内容を共有するための媒体でもあります。本学の提供する教育プログラムの体系性や教育水準の確認のために、シラバスの存在は欠かせません。ここで、教育プログラムとは、主である学位プログラムばかりでなく、数理・データサイエンス・AI 教育プログラムなどの各種サブプログラムも含んでいます。

(4) 社会に対して

シラバスは学外に公開されるため、本学の授業内容について社会に対し説明責任を果たすという役割も担っています。本学は学生やその保護者から国や社会まで多様なステークホルダーを有しており、充実したシラバスは本学が教育の質を保証するための土台となるものです。実務の上では、本学の学生・卒業生が他大学に再入学・編入学した際に、既修得単位の認定を受けるための資料として使用されることもあります。対社会を含め、シラバスが広く説明責任を果たすためのものでもあるという認識を持つことが重要です。

2 シラバス登録の際の諸注意

(1) 「授業で説明する」は不適切

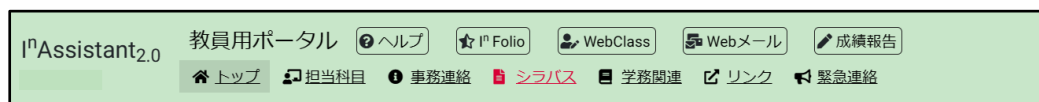
前述の通り、シラバスは学生のためだけにあるものではありません。従って、読み手として履修者のみを想定したような記述は不適切です。特に授業外学修の内容は「授業中に指示する」のように書きたくなりがちですが、できる限り、履修者以外の読み手にも内容が想像できるように記述してください。一通り記入した後に補足的に「詳細は授業で説明する」のように記述するのは構いませんが、「授業で説明する」のみの記述で済ませるのは不適切です。

(2) 各種ガイドラインの確認

成績評価については本学において「成績評価基準について」が定められているほか、学部・学科等や科目委員会により成績評価ガイドラインが作成されています。また、オンデマンド授業やオムニバス授業に関するガイドラインも作成されています。シラバス作成にあたっては、これらの文書も併せてご参照ください。

(3) アイアシスタントの利用

シラバスの登録は本学の教育関連のポータルシステムであるアイアシスタントを通じて行います。シラバス登録期間になると画面上部にある「シラバス」の文字が赤くなり、シラバスの登録ができるようになります。



「シラバス」をクリックするとシラバス登録画面に移ります。担当科目の一覧が表示されるので、各科目名をクリックすると、入力画面に移ります。オムニバス形式で実施する授業科目の場合は代表者のみがシラバス登録を行うことができます。

例年、シラバス登録期間は3月上旬から中旬にかけて設けられます。9月には後期科目のシラバス修正期間が設けられます。

なお、シラバス登録にあたり、他のシラバスを再利用することができます（次節参照）。

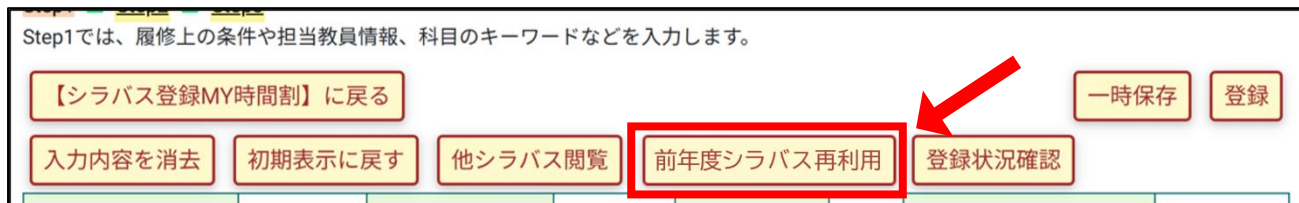
(4) 他のシラバスの再利用方法

他のシラバスを再利用する際の手順は次の通りです。再利用の際は、科目名をよく確認し、科目名と異なる内容のシラバスを登録することのないようくれぐれもご注意ください。

方法① 前年度のシラバスを再利用する場合

前年度開講科目で、「教員名」「科目名」「学期」「曜日」「時限」「時間割コードの先頭の一文字目」の6

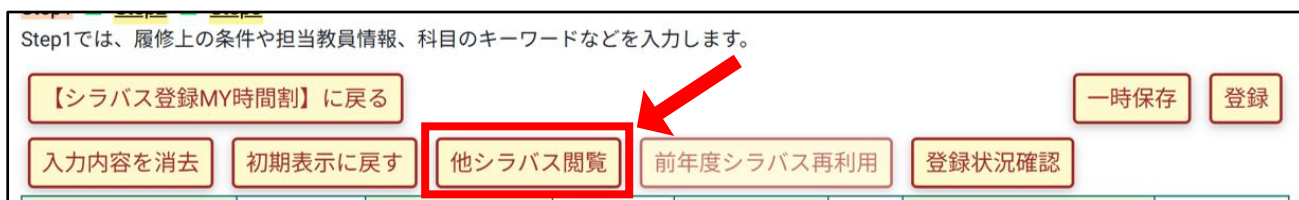
点が一致するシラバスがただ一つに定まるとい条件が満たされる場合には、シラバス入力画面上部の「前年度シラバス再利用」（他のボタンと同様に色が濃い状態になります）をクリックするだけで、該当するシラバスの内容が反映されます。必要に応じて内容を修正し、「登録」をクリックしてシラバスの登録を行ってください。



先の条件が満たされない場合は、「前年度シラバス再利用」のボタンの色が薄く、機能しない状態になります。

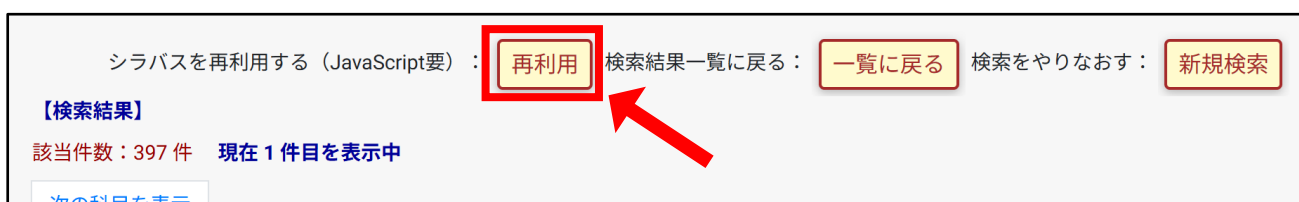
方法② シラバス検索から他のシラバスを選択し、再利用する場合

手順1 シラバス入力画面上部の「他シラバス閲覧」をクリックします。



手順2 シラバス検索画面に移るので、再利用したいシラバスを検索し、選択します。既に登録されているすべてのシラバスの中から再利用するシラバスを選択することができます。

手順3 選択したシラバスの画面の上部にある「再利用」をクリックします。



手順4 再利用したシラバスの登録内容が反映されるので、必要に応じて内容の修正を行ってください。ただし、「主な対象学生」において教育学部のみ「コース・プログラム」と「サブコース」の箇所が、再利用したシラバスの登録内容が反映されず「--未選択--」となることがあります。

手順5 「登録」をクリックするとシラバスの登録が完了します。

3 各項目の解説と記入の仕方

シラバス入力画面は Step1 から Step3 までの 3 ページに分かれています。

Step1 履修上の条件や担当教員情報、キーワードなどを入力します。

※基本的な情報は既に入力されています。

- ・重複科目とは、学務情報上は異なる時間割コードを持つにも関わらず、実質的に1つの授業として実施されている授業科目のことです。同一時間帯に同一教員が複数の授業科目を担当する場合に、それらが自動的に重複科目となります。1つの科目でシラバスを登録すれば、他の重複科目のシラバスにも内容が反映されますが、「主な対象学生」についてはそれぞれのシラバスで登録する必要があります。
- ・セット科目とは、その学期中に同時に履修すべき科目のことです。例えば、週2回のクラスを同一教員が担当する場合は1科目分のシラバスを登録することになりますが、複数の教員が担当する場合はそれぞれシラバスの登録が必要となります。

(1) 主な対象学生（入力必須）

履修者として対象となる学生の学部や学年などをプルダウンから選択します。「行の追加」をクリックすることで5つまで選択可能です。

(2) 主な使用言語

主に使用する言語を日本語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語、その他から一つ選択します。

(3) 履修上の条件

その授業科目を履修する上で前提となる条件を記入します（「復習を必ず行うこと」「連続して3回以上欠席しないこと」のような学修上の指示や注意は、本項目ではなく「履修における留意点」に記入します）。ただし、本項目に記入しても履修申告時にシステム上の履修制限等が行われる訳ではありません。

履修上の条件の記入例

- 「～を希望する者は必ず履修すること」
- 「～していないものは履修を認めない」
- 「～を履修しておくこと」 ※～は科目名
- 「～について～レベル程度の知識を有することが望ましい」

(4) 担当教員情報（一部入力必須）

英語表記の氏名（入力必須）、研究室、個人サイト、質問・相談方法（入力必須）を記入します。

「常勤・非常勤」は自動入力されます。例えば、シラバスを登録する3月まで常勤教員として勤務し、シラバスが公開される4月以降に非常勤講師として授業を担当する場合は、まず「常勤」として登録され、4月になると自動で「非常勤」に情報が更新されます。

質問・相談方法には、学生が質問や相談をする際の方法を記入します。

質問・相談方法の記入例

「月曜 10:00～12:00 に研究室に来ること」

「メール（xxx@iwate-u.ac.jp）で日時を調整した上で対応する」

「随時 WebClass のメッセージから質問・相談を受け付ける」

(5) 他の担当教員名

オムニバス方式で開講する授業科目などで授業担当者が複数名の場合、シラバスを登録できるのは担代表者のみです。そして、担代表者が本項目に他の授業担当者を登録することで、登録された教員の My 時間割上にも授業科目名が表示され、WebClass などの機能を共有することができます。登録の際は、登録したい教員の 学内メールアドレスの@より前の部分を入力し、「追加」をクリックしてください。

(6) キーワード（入力必須）

授業内容を端的に表すキーワードを3～5個程度、日本語と英語（もしくは他の言語）の両方で記入します。シラバス全体を英語で書く場合は、英語のみでも構いません。キーワードは簡易検索のフリーワード検索で検索対象となります。シラバスに日本語と英語（もしくは他の言語）の両方でキーワードを示すことは留学生の助けになります。

キーワードの入力の際は、次のように 一つの枠内に一つのキーワードを日本語と英語の両方で記入します。

キーワード 【100文字以内】	現代 modern
	文化 culture
	文明 civilisation
	ロシア Rossia
	メディア media
	デザイン design
	<input type="checkbox"/> 地域関連科目 <input type="checkbox"/> PBL <input type="checkbox"/> SDGs <input type="checkbox"/> 数理データ

Step2 授業全体の計画や成績評価の方法と基準、履修における留意点などを入力します。

(7) 「学位授与の方針」との関係（自動入力）

その授業科目が、関連する学位プログラムにおける「卒業認定・学位授与の方針」のどの項目の達成にどの程度寄与するのかが示す項目です。本項目はカリキュラムチェックリスト（下記参照）に基づき自動で入力されます。ただし、課外科目や国際教育科目の場合は、「この科目は本学の学位プログラムと直接の関係はありません。」と入力されます。

なお、システムの都合上、その授業科目と直接関係しない学科・コース等の「学位授与の方針」との関係が表示されることがあります。

カリキュラムチェックリストとは

各学位プログラムにおいてカリキュラムを構成する各授業科目が「卒業認定・学位授与の方針」の各項目の達成にどの程度寄与するのかが百分率で示しまとめたものです。「卒業認定・学位授与の方針」はディプロマ・ポリシー（Diploma Policy, DP）とも表記されます。教養教育科目については本学の定める「学位授与の方針：学士課程」の各項目への寄与をまとめたカリキュラムチェックリストが別に定められています。

各学位プログラムのカリキュラムチェックリストは本学 HP のカリキュラム・ポリシーのページで公表されています。

(8) 授業の目的（入力必須）

教育プログラムにおける当該授業科目の位置づけを踏まえ、授業を開講する目的やねらいを記入します。課外科目については目的やねらい及び関係する資格等を記入します。学生にとってその授業を履修する意味や重要性が分かり易いように記入してください。目的と目標の違いについては次節を参照してください。

授業の目的の文末表現の例

「～について学ぶ／理解する」「～する力を養う」
「～する態度を身につける」

教員免許状取得に対応した科目の場合は、「教員の養成の目標及び目標達成のための計画」との関係・位置づけを併せて記入します。以下の記入例において、A、B、Cにはそれぞれ校種・教科、科目分類、知識・技能が入ります。このことについては各学部・研究科にて具体的な定めがありますので、そちらをご確認ください。

教員免許状取得に対応した科目の場合の例

「なお、本科目は（ A ）の教員免許状取得に対応した科目である。「教員の養成の目標及び目標達成のための計画」の中の「 B 」に当たり、「 C 」を養う」

(9) 到達目標（入力必須）

授業の目的を踏まえ、学生がどのような知識・能力等をどの程度まで身につけることを目標に授業を行うのかを具体的に記入します。到達目標はシラバスの中でも核となり、教員にとっては教育目標、学生にとっては学修目標となるものです。学生にとって目標とする基準が分かり易いよう、学生を主体とする表現で記入します。本学の定める「成績評価基準について」あるいは学部・学科・科目委員会等の定める成績評価ガイドラインには、到達目標の達成度に基づく絶対評価により成績評価を行うことが明記されています。このことから、観察可能な行為を伴う目標として到達目標を記入することが推奨されます。

例えば「健康のために毎日 3km 走る」という場合には、健康の維持・増進が「目的」に、毎日 3km 走ることが「目標」にそれぞれ該当します。このように、授業の目的は抽象的で理念的なものであり、到達目標はそれを達成するための具体的な目印となるものと理解するのが良いでしょう。そのため、到達目標を掲げたからといって、その達成のみが授業の目的ということにはなりません。目的を果たす、目的に近づくために具体的にどのような到達点を目標とするのかというのが本項目の意図です。

目的と目標の意味の違い（『日本国語大辞典 第2版』より）

目的 実現しようとしてめざす事柄。めざす所。めあて。

目標 ある物事をなし遂げたり、ある地点まで行きついたりするための目印。めあて。

「～について学ぶ」などは、到達目標というよりも授業の目的に相応しい表現です。このような表現を用いると、少しでも「～について学ぶ」ことで目標が達成されるというように受け取ることができてしまいます。具体的にどの程度まで学ぶことを目標とするのかを示すことが重要です。

「～を理解する」という到達目標がよく見られますが、教員の想定する理解のレベルと学生が「理解した」と自己判断するレベルに大きな差が生まれやすく、やや曖昧な表現です。このようなコミュニケーション・ギャップを防ぎ、学生の主体的な授業外学修を促すためにも、到達目標は具体的かつ観察可能な行為を伴う目標として設定することが推奨されます。

また、「授業内容の 6 割以上を理解できる」とような記入の仕方も適切ではありません。これはどちらかと言えば、成績評価の基準に相当する記述内容です。目標とする到達点の具体的な内容を示す必要があります。

到達目標として不適切な文末表現の例	理由
「～について学ぶ／考える」 「～する意欲を高める」 「～する力を培う」	目標とする到達点（ <u>どの程度まで学ぶことを目標とするのか</u> ）が示されていない
「授業内容の 6 割以上を理解できる」 「教科書の演習問題を 6 割以上正解できる」	目標とする到達点の具体的な内容が示されていない

到達目標として適切な文末表現の例

「～について説明できる（ようになることを目標とする）」

「～について自分の考えを述べることができる」

「～を用いて計算／分析／予測できる」

(10) 授業の概要（入力必須）

授業内容や授業の進め方など、授業全体を把握できるように授業の概要を記入します。特にオンデマンド授業を実施する場合は、学修成果を確認する方法や学生へのフィードバックの方法を記入します。**オンデマンド授業の実施に関する詳細は「オンデマンド授業の実施のためのガイドライン」をご参照ください。**

(11) 実務経験の有無と授業内容への反映

授業担当者が授業内容に関連する実務経験を有する場合に、経歴や実務経験の詳細およびそれを活かした授業内容について記入します。オムニバス形式で、企業等から講師を招いて授業を行う場合にもご記入ください。実務経験の例として、獣医師、臨床心理士、公認心理師、弁護士、小・中・高等学校での教員経験、民間企業や官公庁での勤務経験、自営業などが挙げられます。

(12) 授業の形式（入力必須）

授業の形式を記入します。特にオンデマンド授業を実施する場合は、実施回数を含め、オンデマンドで実施する旨を記入します。また、遠隔授業（下記参照）に該当する場合は、チェック欄にチェックを入れます。

授業の形式の例

「講義形式」「演習形式」「講義および演習／グループワーク」「PBL（Project based leaning）」

「講義（14回のうち3回分をオンデマンドで実施）」

遠隔授業とは

大学設置基準により、全授業回の半数を超えて（全14回の場合、8回以上）オンライン授業（オンデマンド授業を含む）を実施する場合、その授業科目は「遠隔授業」という扱いになります。

(13) 授業外学修（予習・復習・課題等）への指示（入力必須）

授業外学修（予習や復習、課題への取り組みなど）の内容を記入します。授業外学修を含む45時間の学修で1単位という単位制度の実質化の観点から、授業担当者は授業外学修の内容まで含め授業を設計することが求められます。従って、「特になし」や「予定していない」などの記述は不適切です。学生の

自主性に任せるという意図で「特に指示はしない」という意味であれば、実際の学生の学修状況を確認し、もし十分な授業外学修が行われていない場合には、具体的な指示を検討する必要があります。

単に「予習・復習すること」などの記述や学修時間の目安の提示ではなく、予習・復習・課題等の内容を具体的に記入してください。また、「2 シラバス登録の際の諸注意」にある通り「授業中に指示／説明する」という記述は不適切です。

具体例については15ページ以降の「付録B 充実したシラバスの例」をご参照ください。

授業外学修への指示として不適切／不十分な例	理由
「特になし」「予定していない」	単位制度（授業外学修を含む45時間の学修で1単位）に反するため不適切
「授業中に指示する」	読み手としての想定が履修者のみのため不適切
「予習・復習を欠かさないこと」 「各回約2時間の学習を目安とする」	具体的な内容の記述がないため不十分

(14) 評価方法・割合・評価の観点（一部入力必須）

評価方法（入力必須）とそれぞれの方法が全体の評価に占める割合（入力必須）、評価の観点を記入します。評価方法として「平常点」「レスポンスカード」「小テスト」「課題・レポート」「期末テスト」が初期入力されていますが、例として示しているだけのものなので、適宜編集してください。用いない方法（割合が0%の方法）は文字列を消去してください。空欄になった行は表示されなくなります。次の「評価の基準」にあるように、「出席点」など出席自体に加点する（ように見える）記入は避けてください。割合は百分率で合計が100%になるように入力します。30~40%のように幅を持たせて入力したい場合は半角記号の「~」を用いてください。数字または半角記号の「~」以外の文字を入力して登録しようとするとエラーになります。評価の観点は、重視するものに「◎」や「○」、参考にするものに「△」などと記入します。

評価方法(※) 【60文字以内】	割合(※)	評価の観点【5文字以内】			
		関心・意欲	知識・理解	技能・表現	思考・判断
平常点	20 %	◎	○		
期末テスト	80 %		◎	○	◎
	%				

↑用いない（割合が0%の）方法の文字列を消去

↑「◎」「○」「△」などの記号を入力

(15) 評価の基準（入力必須）

成績評価の基準を具体的に記入します。本学の定める「成績評価基準について」や学部・学科・科目委員会等の定める成績評価ガイドラインには、到達目標の達成度に基づく絶対評価により成績評価を行うことが明記されています。到達目標ごと、あるいは評価方法ごとに、どの程度の水準でどの程度の評価になるのかを詳細に記入します。「平常点、レポート、試験により総合的に評価する」のように実質的に評価方法と変わらない記述や、単なる評点と評価の関係（「90点以上で秀」など）の説明に留まる記述では不十分です。教員が評価を付ける際の手続きの説明になりがちですが、そうではなく、例えば「教科書の練習問題が確実に解けるようになれば「良」」のように、どの程度の達成度でどの程度の評点・評価になるのかを学生がイメージできるように記述することが重要です。

複数の評価規準（評価項目・観点）について複数の評価基準（達成度の水準・尺度）を設定することが一つの理想と言えるでしょう（cf. ルーブリック）。具体的な評価規準・基準を学生と共有することは、成績評価の公平性や、学生の主体的な学修の促進につながると考えられます。

また、到達目標の達成度に基づき成績評価を行うという方針から、「出席点」のように出席さえしていれば加点されるように見える記入は避けてください。平常点に相当する内容で「出席点」を用いている場合は「平常点」を用います。また、平常点の基準としても「出席」や「出席状況」などの表現は避け、「授業への参加度」のように学修のプロセスを評価する意図が伝わるように記入します。なお、出席に関しては「4回以上の欠席で不合格とする」のように評価を受けるための必要条件として用いることが推奨されます。

具体例については15ページ以降の「付録B 充実したシラバスの例」をご参照ください。

評価の基準として不十分な例	理由
「平常点、レポート課題、期末試験により総合的に評価する」	実質的に評価方法の記述と変わらない
「平常点(20%)、レポート課題(20%)、期末試験(60%)により評価し、60点以上を合格とする」	どの程度の達成度で60点以上になるのかが分かりづらい

出席点に関する修正例

修正前	修正後
「レスポンスカードの提出により出席点とする。ただし白紙またはそれに近い場合は出席と認めない」	「レスポンスカードの内容を評価し平常点とする」
「平常点は出席状況により評価する」	「平常点は授業への参加度により評価する」

参考) ルーブリックとは

学習目標の達成度を評価するためのツールの一つです。評価規準（評価項目・観点）とその水準・尺度を複数の段階に分けて記述した評価基準から構成されます。レポートやプレゼンなどの評価に特に有効

とされていますが、その考え方は授業科目の成績評価の際にも参考になります。

論証型レポートのルーブリックの例

	基準 C	基準 B	基準 A
規準① 全体の構成	序論・本論・結論が区別されていない	序論・本論・結論が部分的に区別されている	序論・本論・結論の構成が明確になっている
規準② 序論の内容	目的と背景のいずれの記述も不十分である	目的と背景のどちらかの記述が不十分である	目的と背景が適切に記述されている
規準③ 文章表現	分かりやすく正確な文章表現ができていない箇所が散見される	一部を除き分かりやすく正確な文章表現ができています	分かりやすく正確な文章表現ができています
⋮			

(16) 評価に関する備考

成績評価について補足説明があれば記入します。ルーブリックのファイルを添付することもできます。

(17) 履修における留意点

履修する上での留意点があれば記入します。

(18) 教科書／教材や参考文献の指定

教科書や教材、参考文献の指定があれば記入します。ここで指定された参考文献の情報は図書館と共有され、図書館での配架が検討されます。**その際、先に記入してある文献ほど、配架の優先順位が高くなります。**「教科書／教材」は著者名またはタイトルのみでの入力登録することができます。これは、以下のように図書の情報ではなく教科書や教材に関する説明文を表示できるようにするためです（以下の例では一行ごとに登録を行うことで2行の文章を表示しています）。

教科書 / 教材	教科書は特に指定しません。 授業に必要な教材については、そのつど配布します。
----------	-------------------------------------------

Step3 詳細計画を入力します。

(19) 詳細計画（授業内容）（入力必須）

各回の授業の具体的な内容を記入します。「1 シラバスの意義と役割」にある通り、大学設置基準により、大学には事前に学生に年間の授業計画を示す義務があります。シラバスの充実を図るためには、授業内容をキーワードで示すのではなく、「何を」「どの程度まで」学修するのかを文章で説明すると良いでしょう。加えて、各回の到達目標を提示するとさらに望ましいものになります。

オムニバス方式で授業を開講する場合、担当代表者は各回の授業内容について他の授業担当者に確認し、取りまとめたうえでシラバスに記入します。また、各回の担当者を明記します（「備考」欄でも可）。

なお、「中間試験」や「期末試験」のように試験のみの実施で1回分の授業を構成することは避け、「後半のまとめと期末試験」のように授業と試験を組み合わせる形で入力するようにしてください。

試験に関する修正例

修正前	修正後
「中間試験」	「前半のまとめと中間試験」「 中間試験と後半への導入 」
「期末試験」	「後半のまとめと期末試験」「 全体のまとめと期末試験 」

(20) 詳細計画（授業外学修（予習・復習・課題等）への指示）（入力必須）

各回の授業外学修（予習・復習、課題への取り組みなど）の具体的な内容を記入します。前述の通り、単位の実質化の観点から、授業担当者は授業外学修の内容まで含め授業を設計することが求められます。単に「予習・復習すること」などの記述や学修時間の目安の提示ではなく、予習・復習・課題等の内容を具体的に記入してください。また、「2 シラバス登録の際の諸注意」にある通り「授業中に指示／説明する」という記述は不適切です。前項目の授業内容の繰り返しのような記述も避けてください。

オムニバス方式で授業を開講する場合、担当代表者は各回の授業外学修への指示について他の授業担当者に確認し、取りまとめたうえでシラバスに記入します。

授業外学修を促すためには、「何を」「どの程度まで」学修するのかを明確にすると効果的です。また、例えば「～に目を通しておくこと」ではなく「～に目を通し、要点を400字程度でまとめておくこと」とするなど、具体的な成果物をイメージできるように指示することも有効です。

具体例については15ページ以降の「付録B 充実したシラバスの例」をご参照ください。

授業外学修への指示として不適切／不十分な例	理由
授業内容の繰り返し（コピペ）	明らかに不十分
「特になし」	単位制度（授業外学修を含む 45 時間の学修で 1 単位）に反するため不適切
「授業中に指示する」	読み手としての想定が履修者のみのため不適切
「要予習・復習」 「1 時間の復習を求める」	具体的な内容の記述がないため不十分

(21) 詳細計画（備考）

オムニバス方式で授業を開講する場合、各回の担当者を明記します（「授業内容」欄でも可）。オンデマンド授業を実施する場合、その旨を記入します。

付録 A シラバスの仕様に関する前年からの変更点

○シラバスを再利用する際の利便性の向上

シラバス登録の際に、(特定の条件が満たされる場合に) 前年度から継続して担当する授業科目のシラバスをワンクリックで再利用できるようにしました。

○項目の削除

「キーワード」に付随する「地域関連科目」(チェックボックス) を削除しました。

付録 B 充実したシラバスの例

充実したシラバスの例として次の2点を挙げます。次ページ以降に実際のシラバスを掲載します。

- ・2025年度前期「動物生産学」(農学部 平田統一先生)
- ・2025年度後期「認知心理学演習 A」(人文社会科学部 立花良先生)

年度	2025	開講学期	前期	単位数	2	時間割コード	AIAB
授業科目名	動物生産学			担当教員名	平田 統一		
授業科目名：英語	Animal Production Science						
重複科目名	畜産学概論【VN01】（【時間割コード】）						
セット科目名							
開講情報		曜日	時限	時間割コード		【凡例】 ：当該科目 ：同時に履修すべき 科目（セット科目）	
	1	月	3	AIAB			
主な対象学生	農学部 動物科学・水産科学科 動物科学コース 1						
科目の情報	科目の種別	専門教育科目		科目番号	AAS112B		
主な使用言語	Japanese						
履修上の条件	動物科学コース1年次・必須科目 （共同獣医学科1年次・「畜産学概論」必須科目との重複科目）						
担当教員情報	氏名（カナ）	平田 統一（ヒラタイチ）					
	担当教員名（英語）	Toh-ichi HIRATA					
	常勤・非常勤	常勤					
	所属	農学部					
	研究室	御明神牧場内（雫石町御明神大石野）					
	公式サイト	岩手大学 研究者総覧：http://univdb.iwate-u.ac.jp/html/482_ja.html researchmap：https://researchmap.jp/read0168011					
	個人サイト						
質問・相談方法	質問がある学生は、メール（hirata@iwate-u.ac.jp）にてお問い合わせください。						
他の担当教員							
キーワード	畜産業、地域なりわいの維持、発展、家畜と飼養、飼料、畜産物、畜産物加工、アニマルウェルフェア、地域関連科目、PBL、SDGs						
学位授与方針との関係	農学部 動物科学・水産科学科 動物科学コース						
	【知識・理解】	農学全体を俯瞰する幅広い知識及びその基礎となる教養を持っている。					10%
	【知識・理解】	動物生産及び動物科学分野に関する知識を持っている。					15%
	【思考・判断】	動物関連産業に関する課題の解決を適切に行うため、動物生産及び動物科学分野に関する知識により考察することができる。					25%
	【関心・意欲】	動物関連産業に関する課題に関心を持ち、課題の解決に意欲的に取り組むことができる。					25%
授業の目的	【態度】	動物関連産業に関する課題の解決を客観的に行うため、情報収集及び議論を積極的に行うことができる。					25%
	<p>本講義「畜産学概論」は、動物生産の基本的な概念を学び、畜産業の実態と将来の発展について理解を深めることを目的とする。動物生産は、食料生産の基盤であり、家畜の飼養管理や生産技術を体系的に理解することは、畜産に関わるすべての分野において重要な知識である。本講義では、動物生産の基本原則を学びながら、日本や畜産県である岩手県の畜産業の現状や課題についても考察し、将来的な持続可能な畜産のあり方について議論する。</p> <p>現代の畜産業は、単なる家畜の飼養だけではなく、環境問題、動物福祉、国際貿易、食の安全性、バイオテクノロジーなど、多岐にわたる要素と密接に関係している。そのため、畜産に関わる基礎知識だけでなく、最新の技術や政策についても学び、科学的根拠に基づいた議論ができる能力を養うことが求められる。さらに、家畜の生理や行動特性を理解することで、効率的かつ動物福祉に配慮した生産システムを考える視点を身につけることも、本講義の重要な目的である。</p> <p>また、本講義は動物科学コースおよび共同獣医学科の1年生を対象としている。動物科学コースの学生には、畜産業全体の構造や経営、飼養管理、遺伝育種、繁殖技術などの知識を提供し、将来的に畜産関連の研究・技術開発・経営に携わるための基礎を養う。一方、共同獣医学科の学生には、家畜の健康管理や疾病予防が畜産業の発展にどのように貢献するかを理解させ、臨床獣医学だけでなく産業動物の生産現場における獣医師の役割について考えさせる。</p> <p>本講義では、家畜の飼養管理や繁殖、栄養学などの基礎知識を踏まえ、畜産物の生産から加工、流通に至るまでの一連のプロセスを学ぶ。また、環境負荷軽減やアニマルウェルフェア（動物福祉）、スマート畜産技術など、持続可能な畜産の実現に向けた最新の取り組みについても取り上げる。これにより、動物生産に関する幅広い知識を体系的に身につけ、畜産業の課題を科学的に分析し、解決策を考えられる能力を養うことを目的とする。</p>						
到達目標	<p>本講義を履修することにより、学生は動物生産学の基礎知識を体系的に理解し、畜産業の現状や課題に対して科学的視点を持って考察できるようになることを目指す。具体的な到達目標として、以下の点を設定する。</p> <p>1．家畜と畜産の基本概念の理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「家畜」と「畜産」の定義を明確にし、それらが人間社会に果たす役割を説明できる。 ・家畜の品種や生産形態の違いを理解し、それぞれの特徴を説明できる。 <p>2．主要畜産物の生産プロセスの理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の主要な畜産物（牛乳、牛肉、豚肉、鶏肉、鶏卵）の生産システムを理解し、それぞれの生産工程について説明できる。 ・飼養管理、繁殖技術、遺伝改良、栄養管理など、動物生産に必要な基本技術を習得する。 						

到達目標	<p>3. 家畜の生理・行動特性の理解と応用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・乳・肉・卵の生産に関わる家畜の生理学的特性を理解し、それらが生産性に与える影響を説明できる。 ・家畜の行動学的特性を学び、アニマルウェルフェア（動物福祉）の観点から、より適切な飼養管理方法を提案できる。 <p>4. 畜産物の加工・流通・品質管理の理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畜産物の加工技術（乳製品、食肉加工、卵加工など）について基礎的な知識を身につける。 ・食品安全の重要性を理解し、HACCPなどの品質管理システムの役割を説明できる。 <p>5. 畜産業を取り巻く環境・経済・社会的課題への理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畜産業の環境負荷（温室効果ガス排出、飼料資源の消費）を理解し、持続可能な畜産のための対策を考察できる。 ・畜産経営の基礎知識を身につけ、経済的視点から畜産業の持続可能性について議論できる。 ・国際的な食料需給の変動や畜産政策の影響を理解し、グローバルな視点で畜産業の未来を考えられるようになる。 		
授業の概要	<p>本講義「畜産学概論」は、動物生産の基本原則を学ぶとともに、現代の畜産業が抱える課題や発展の方向性について理解を深めることを目的とする。講義では、畜産業の基礎知識として、家畜の生理・行動・繁殖・飼養管理・栄養学などを学ぶほか、畜産物の生産から加工・流通・品質管理までの一連の流れを体系的に学習する。</p> <p>畜産業は、食料生産において重要な役割を担っているが、近年はアニマルウェルフェア、環境負荷の低減、持続可能な生産システムの構築といった社会的要請も高まっている。また、日本の畜産業は飼料の多くを輸入に依存しており、国際的な食料需給や貿易政策の影響を大きく受けるため、国内外の動向を考慮した畜産経営が求められている。このような背景を踏まえ、本講義では、日本および世界の畜産業の現状を俯瞰し、今後の発展に必要な知識や技術について学ぶ。</p> <p>講義は、以下の主要テーマに沿って展開する。</p> <p>第1回 家畜、畜産、畜産学とは 第2回 豚肉生産の現状とブタの特徴 第3回 牛乳・牛肉生産の現状とウシの特徴 第4回 鶏肉・鶏卵生産の現状とニワトリの特徴 第5回 特用家畜（ウマ、ヒツジ、ヤギなど）の特徴 第6回 家畜改良と家畜育種 第7回 乳・肉・卵の生産にかかわる生理 第8回 飼料と飼養管理 第9回 畜産物の加工 第10回 畜産副産物（皮、骨や臓器・血液由来成分）の機能と利用 第11回 家畜の衛生 第12回 家畜の繁殖管理とそれに関わる技術 第13回 家畜の行動と福祉 第14回 畜産経営と取り巻く現状 第15回 まとめ（試験）</p> <p>これらのテーマを通じて、学生は動物生産に関する幅広い知識を体系的に習得し、畜産業の課題を科学的に分析し、解決策を考えられる能力を養う。本講義では、データや最新の技術を用いた具体的な事例を交えながら、現場での実践に役立つ知識を提供する。</p> <p>また、動物科学コースの学生には、畜産経営や技術開発に関連する専門知識を深め、畜産業の現場、現状を知ることを目指す。一方、共同獣医学科の学生には、産業動物の健康管理や疾病予防が畜産生産性に与える影響を理解し、臨床獣医師としての役割だけでなく、家畜の健康を通じて畜産業の発展に貢献する視点を養うことを期待する。</p> <p>本講義を通じて、学生が動物生産に関する基礎知識を確実に身につけるとともに、畜産業の現状を多角的に理解し、科学的根拠に基づいた議論や課題解決に取り組む力を養うことを目指す。</p>		
実務経験の有無と授業内容への反映	<p>担当教員は、民間企業での経験を踏まえ、「食」を担う農畜産業に対する基本的理解と課題について講義を組み立て、動物生産現場をイメージしやすいよう工夫し、学生自ら考察する糧とする。</p>		
授業の形式	<p>教室での講義方式、毎回の講義後に小レポートを課す。</p> <p>遠隔授業への該当（全授業回の半数を超えてオンライン授業を実施する場合） 【しない】</p>		
授業外学修（予習・復習・課題等）への指示	<p>講義テーマに関連する、入江正和 編著「畜産学」および関連書籍中の該当部分を予習、復習すること。</p>		
<p style="text-align: center;">詳細計画（各回または週の具体的な授業内容、目標など）</p>			
回/週	授業内容	授業外学修（予習・復習・課題等）への指示	備考
1	家畜、畜産、畜産学とは	入江正和 編著『畜産学』第1章、第2章他参照。レポート課題「私たちの生活と畜産の関わり」（400～600字）	
2	豚肉生産の現状とブタの特徴	入江正和 編著『畜産学』第2章、第5章、第7章他参照。レポート課題「日本の養豚産業の現状と課題」（400～600字）	
3	牛乳・牛肉生産の現状とウシの特徴	入江正和 編著『畜産学』第2章、第5章、第7章他参照。レポート課題「日本の酪農と肉牛生産の現状と課題」（400～600字）	
4	鶏肉・鶏卵生産の現状とニワトリの特徴	入江正和 編著『畜産学』第2章、第5	

4		章、第7章他参照。レポート課題「日本の養鶏業の現状と課題」(400~600字)	
5	特用家畜(ウマ、ヒツジ、ヤギなど)の特徴	入江正和 編著『畜産学』第2章、第5章、第7章他参照。レポート課題「特用家畜の役割と今後の活用可能性」(400~600字)	
6	家畜改良と家畜育種	入江正和 編著『畜産学』第3章他参照。レポート課題「家畜の品種改良の現状と今後の可能性」(400~600字)	
7	乳・肉・卵の生産にかかわる生理	入江正和 編著『畜産学』第4章、第6章他参照。レポート課題「生産性を高めるための管理方法を提案する」(400~600字)	
8	飼料と飼養管理	入江正和 編著『畜産学』第4章、第5章他参照。レポート課題「日本の飼料自給率向上のための戦略」(400~600字)	
9	畜産物の加工	入江正和 編著『畜産学』第4章、第5章他参照。レポート課題「畜産物の加工技術の進化と未来の可能性」(400~600字)	
10	畜産副産物(皮、骨や臓器・血液由来成分)の機能と利用	入江正和 編著『畜産学』第7章他参照。レポート課題「畜産副産物の新たな活用法について」(400~600字)	
11	家畜の衛生	入江正和 編著『畜産学』第5章他参照。レポート課題「畜産における家畜衛生管理の重要性」(400~600字)	
12	家畜の繁殖管理とそれに関わる技術	入江正和 編著『畜産学』第6章他参照。レポート課題「畜産における最新の繁殖技術とその展望」(400~600字)	
13	家畜の行動と福祉	農林水産省「アニマルウェルフェアについて」他参照。レポート課題「アニマルウェルフェアの推進と畜産経営のバランス」(400~600字)	
14	畜産経営と取り巻く現状	入江正和 編著『畜産学』第8章他参照。レポート課題「日本の畜産業の持続可能な発展に向けた提案」(400~600字)	
15	まとめ(試験)	【第1問】(基礎理解:家畜と畜産の定義) 【第2問】(応用:畜産技術と管理) 【第3問】(論述:家畜の行動と福祉) 【第4問】(分析:畜産の現状と課題) 【第5問】(総合考察:持続可能な畜産)	
16			
17			
18			

成績評価の方法と基準	評価方法	割合	評価観点			
			関心・意欲	知識・理解	技能・表現	思考・判断
	平常点	0%				
	レスポンスカード	0%				
	小テスト	0%				
	課題・レポート	50%	1	1		1
	期末テスト	50%		30	10	10

評価の基準

各回「畜産学概論」講義後1週間以内に、課題テーマについてアイアシスタントを通じて小レポートを提出すること。本文400字から600字程度、平常点(出席点)は小レポートの提出をもって替える。レポート提出1点、内容によって3点まで加点(満点4点×14回=56点)。期末テスト5問×10点。100点以上切捨て。不可60点未満、可60~70点未満、良70~80点未満、優80~90点未満、秀90点以上(場合によって評価基準点を調整する)。

履修における留意点	本講義は、評価に対する小レポートの比重が重いので毎回忘れずに提出すること。
教科書/教材	入江正和 編著、畜産学、養賢堂、2022年、9784842505831
参考文献	

年度	2025	開講学期	後期	単位数	2	時間割コード	J102
授業科目名	認知心理学演習 A			担当教員名	立花 良		
授業科目名：英語	Seminar in Cognitive Psychology A						
重複科目名	認知心理学演習 A【JS02】（【時間割コード】）						
セット科目名							
開講情報		曜日	時限	時間割コード		【凡例】 ：当該科目 ：同時に履修すべき 科目（セット科目）	
	1	金	5	J102			
主な対象学生	人文社会科学部 人間文化課程 行動科学専修プログラム 3,4						
科目の情報	科目の種別	専門教育科目	科目番号	HDD052J, HGD052J			
主な使用言語	Japanese						
履修上の条件	<ul style="list-style-type: none"> ・「履修における留意点」を必ず確認すること ・「基礎統計学」「心理学基礎実験」を履修済みであること(または同等の知識を有すること) 						
担当教員情報	氏名(カナ)	立花 良(タチバナリョウ)					
	担当教員名(英語)	Ryo Tachibana					
	常勤・非常勤	常勤					
	所属	人文社会科学部 人間文化課程					
	研究室	人社 - 2 - 4 1 2					
	公式サイト	岩手大学 研究者総覧 : http://univdb.iwate-u.ac.jp/html/100000240_ja.html researchmap : https://researchmap.jp/ryotachibana					
	個人サイト						
質問・相談方法	随時 WebClass のメッセージから質問・相談を受け付ける						
他の担当教員							
キーワード	統計解析ソフトウェア statistical software、実験制御ソフトウェア software for psychology and neuroscience、知覚心理学 perceptual psychology、認知心理学 cognitive psychology、心理学方法論 psychological methodology						
学位授与方針との関係	人文社会科学部 人間文化課程人間行動専修プログラム						
	【専修DP1: 知識・理解】	人間行動に関わる専門分野について知識を幅広く身につけており、人間行動を総合的・多角的に理解することができる。					10%
	【専修DP2: 思考・判断】	人間行動に関する専門的な知識等を活用して、人間や社会に潜む問題や課題を見出しその解決に向けた思考を展開することができるとともに、社会に積極的な提案を行うことができる。					10%
	【専修DP3: 技能・表現】	調査や実験に関する技法、そしてそれらから得られたデータの分析に関する技法を身につけている。					10%
	【専修DP4: 技能・表現】	分析や考察の内容を文章として適切に表現できる能力を有しているとともに、発表や討論の機会を通じて、コミュニケーションやプレゼンテーションのスキルを修得している。					30%
	【専修DP6: 関心・意欲】	専門分野の学問内容、最新の研究成果、動向等について興味・関心を持っている。					20%
	【専修DP7: 関心・意欲】	専門性を活かして、地域社会に参画する意欲を持っている。					10%
	【専修DP8: 態度】	人間に対する深い理解と広い視野に基づく学際的・総合的な課題探求能力を修得し、現代社会の様々な課題を全体的に把握し、それらの課題に適切かつ柔軟に対処しようとする態度を身につけている。					10%
授業の目的	知覚・認知心理学という、人間の情報処理プロセス解明を目指す実証研究に必須となる、統計解析や実験制御におけるソフトウェアやプログラミング手法について理解し、基礎的スキルを習得する。						
到達目標	<p>本講義の目的である、「知覚・認知心理学で必須となる統計解析&実験制御ソフトウェアやプログラミング手法の理解&習得」を達成するため、下記3つの到達目標を設ける。</p> <p>実験制御の基礎理解 心理学実験に必須となる実験制御ソフトウェアやプログラムライブラリの基礎知識を説明でき自分で使えるようになる</p> <p>統計解析の基礎理解 データサイエンスに必須となる統計解析ソフトウェアやプログラムライブラリの基礎知識を説明でき自分で使えるようになる</p> <p>ソフトウェアの使用法と論文へのまとめ方の理解 心理学実験制御と統計データ解析、および論文へのまとめを、実際にソフトウェアやプログラムを使用して自分で行えるようになる</p> <p>上述の到達目標に大きく共通する「説明できる」「自分でできる」レベルの基礎知識および実験スキルと積極的なコミュニケーション能力を、自身の報告プレゼンテーション(ソフトウェアによる実演を含む)および全体ディスカッションによって、毎講義で実践的に習得・向上していく</p>						
授業の概要	<p>【内容】知覚・認知心理学における実験制御&統計解析ソフトウェアなどの理解・スキル習得・議論</p> <p>・知覚および認知心理学における代表的かつ最新のソフトウェアやプログラムツールを実際に実験制御プログラミングを</p>						

授業の概要	<p>通して学習していき、専門知識・実際の使用方法と論文記載方法を習得する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ソフトウェアやプログラムツールの使用方法を実演例を含めて報告する課題遂行を行うことで、プレゼンテーションスキル、データサイエンススキル知識理解、および報告発表に対する論理的な議論法とコミュニケーション能力を実践的に習得する。 <p>【進め方】毎講義で担当者が報告&実演発表、それに対する全体議論</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初回ガイダンスで、指定されたソフトウェアまたはプログラムツールの担当者と担当回を決定 ・第2回から、担当者は担当回までに「使用するソフトウェアやプログラムツールの使用方法の整理と実演準備」「特徴や詳細などを整理した実演資料を作成」を行い、担当回でデモンストレーション(実際に実験制御を行うプログラミングなど)を含めた報告発表 ・担当者の実演報告後、内容に関する不明点や応用性に通じる点について全員で議論、内容のまとめを行う 		
実務経験の有無と授業内容への反映			
授業の形式	<p>演習実習形式(全員がソフトウェアやプログラミング操作を行うため、PCは必須)</p> <p>遠隔授業への該当(全授業回の半数を超えてオンライン授業を実施する場合) 【しない】</p>		
授業外学修(予習・復習・課題等)への指示	<ul style="list-style-type: none"> ・予習および課題として、担当者は、担当対象となるソフトウェアやツールの仕様と操作方法を説明・実演できるようにし、報告資料を事前に必ず作成してくる(授業前にwebclassへの事前アップロード)。担当者以外の履修者は、担当者の報告資料を事前に確認し、使用するソフトウェアやプログラミング環境を同じように使えるように、自分のPCに準備してくる。報告資料作成では、内容に加えて「ソフトウェアやツールにおける不明点」「自身が積極的に関心を持った使用方法や応用例」を上げ、履修者全員でこれらの点について共有・議論・習得できるように整理してくる。 ・復習として、報告された論文の内容、および不明点に対して授業で議論・学習した点、報告者の発表資料およびプレゼンテーション方法の良かった点を整理すること。これにより、自分の報告資料作成およびプレゼンテーション方法の向上に役立てていく。 		
詳細計画(各回または週の具体的な授業内容、目標など)			
回/週	授業内容	授業外学修(予習・復習・課題等)への指示	備考
1	<p>ガイダンス、およびソフトウェア選定&リサーチ方法の解説</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講義内容や進め方、成績評価などの詳説 ・課題内容、担当者と担当回のスケジュール決定 ・ソフトウェアなどについての説明 	<p>【予習】</p> <p>シラバスをよく読んでくること。</p> <p>【復習】</p> <p>配布資料およびガイダンス内容を確認し、自身の関心テーマや、それに合うソフトウェアなどの予備調査を行うこと。</p> <p>【課題】</p> <p>次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。</p>	
2	<p>ソフトウェアなどについての説明</p> <p>実験制御ソフトウェアの使用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題報告発表 ・全体議論 	<p>【復習】</p> <p>報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる</p> <p>【課題】</p> <p>次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。</p>	
3	<p>実験制御ソフトウェアの使用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題報告発表 ・全体議論 	<p>【復習】</p> <p>報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる</p> <p>【課題】</p> <p>次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。</p>	
4	<p>実験制御ソフトウェアの使用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題報告発表 ・全体議論 	<p>【復習】</p> <p>報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる</p> <p>【課題】</p> <p>次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。</p>	
5	<p>実験制御プログラムツールの使用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題報告発表 ・全体議論 	<p>【復習】</p> <p>報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる</p> <p>【課題】</p> <p>次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。</p>	
6	<p>実験制御プログラムツールの使用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題報告発表 ・全体議論 	<p>【復習】</p> <p>報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる</p> <p>【課題】</p> <p>次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。</p>	
7	<p>実験制御プログラムツールの使用方法</p> <ul style="list-style-type: none"> ・課題報告発表 ・全体議論 	<p>【復習】</p> <p>報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる</p> <p>【課題】</p>	<p>履修人数によっては、前半のまとめ実施、および教員から関連する研究事例と実際の応用例を紹介する時間を設ける。</p>

7		次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。	
8	統計解析ソフトウェアの使用方法 ・課題報告発表 ・全体議論	【復習】 報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる 【課題】 次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。	
9	統計解析ソフトウェアの使用方法 ・課題報告発表 ・全体議論	【復習】 報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる 【課題】 次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。	
10	統計解析ソフトウェアの使用方法 ・課題報告発表 ・全体議論	【復習】 報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる 【課題】 次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。	
11	統計解析プログラムツールの使用方法 ・課題報告発表 ・全体議論	【復習】 報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる 【課題】 次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。	
12	統計解析プログラムツールの使用方法 ・課題報告発表 ・全体議論	【復習】 報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる 【課題】 次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。	
13	統計解析プログラムツールの使用方法 ・課題報告発表 ・全体議論	【復習】 報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる 【課題】 次回担当者は、該当するソフトウェアなどの整理・報告資料の作成を行うこと。	
14	・実験制御と統計解析の論文へのまとめ方 ・講義全体の内容まとめと整理	【課題】 報告資料および全体議論でのメモを復習し、レスポンスカードにまとめる	
15			
16			
17			
18			

成績評価の方法と基準	評価方法	割合	評価観点			
			関心・意欲	知識・理解	技能・表現	思考・判断
	平常点 (毎講義における報告内容へのディスカッション)	20 30%				
	平常点 (毎講義における報告内容へのレスポンス提出)	20 30%				
	課題遂行 (担当箇所における報告資料作成)	20 30%				
	課題遂行 (担当箇所における実演プレゼンテーション)	20 30%				

評価の基準

下記は目安であり、最終的な履修者人数によって配分を調整します

平常点 (毎講義における報告内容へのディスカッション): 26点分

- ・報告回13回(初回ガイダンス講義回は除外) × 2点=26点満点
- ・毎講義報告発表後の議論において、内容に関連する質疑を必ず行う(2点)
- ・自身の質疑が、報告内容における不明確な点を「明確に」(1点)「論理的に」(1点)指摘できていること
- ・単なる感想やコメント、主観的な捉え方による質疑ではいけない
- ・質疑および議論に参加しない場合などは、その講義回は0点
- 全体議論時に出席確認も行う

平常点 (毎講義における報告内容へのレスポンス提出): 28点分

- ・全14回 × 2点=28点満点
- ・講義後に復習を可能にするため、webclassから、報告内容に関する内容をまとめたレスポンスカードを提出
- ・報告内容において教員が指摘＆補足説明した用語などの重要点を「明確に」(1点)「説明回答」(1点)できていること

- ・期限までに未提出の場合は、その講義回のレスポンス点は、0点
- ・レスポンスにまとめた内容が、報告内容と教員の指摘に一致しない場合や白紙の場合などは、その講義回は、0点

課題遂行 (担当箇所における報告資料作成): 20点分

- ・平常点を獲得したとしても、課題遂行が0点の場合、本講義の目的未達成となり、単位は「不可(D)」。必ず課題遂行を達成すること。
- ・単に毎講義出席し、平常点のみ獲得すればよいわけではないので十分注意
- ・課題遂行は履修人数によって変わるが、1人1回もしくは2回(履修人数が極端に少ない場合は、変更する場合があります)
 - 課題遂行が1回の場合、1回×20点=20点満点
 - 課題遂行が2回の場合、2回×10点=20点満点
- ・指定されたソフトウェアまたはプログラムツールの仕様と操作方法を調べ、内容を要約しまとめた資料を作成、授業前に提出
- ・内容については、「仕様」「実験および統計における関連性」「実際の使用方法」の3つが正しく理解・整理されているかを評価基準とする

課題遂行 (担当箇所におけるプレゼンテーション): 26点分

- ・平常点を獲得したとしても、課題遂行が0点の場合、本講義の演習未達成となり、単位は「不可(D)」。必ず課題遂行を達成すること。
- ・単に毎講義出席し、平常点のみ獲得すればよいわけではないので十分注意
- ・課題遂行は履修人数によって変わるが、1人1回もしくは2回(履修人数が極端に少ない場合は、変更する場合があります)
 - 課題遂行が1回の場合、1回×26点=26点満点
 - 課題遂行が2回の場合、2回×13点=26点満点
- ・自身のまとめた報告内容を、操作方法の実演を含めて講義でプレゼンテーション
- ・実験デモンストレーションおよびプレゼンテーションにおける「スライドの明確さ」「話し方の明確さ」「操作方法と動作の適切さ」の3つが評価基準とする

上記4項目の評価を合算したものを最終評価点とし、「秀(90点以上)」、「優(80~89点)」、「良(70~79点)」、「可(60~69点)」、「不可(60点未満)」とする。

ただし、課題遂行は必須となる。課題遂行が1つでも0点の場合は、平常点のみで点数が獲得できていたとしても、講義目的が達成できないため、単位は「不可」とする。

履修における留意点	<ul style="list-style-type: none"> ・受講希望者が15名以上の場合は、履修制限を実施する場合があります ・初回ガイダンスに出席し、担当テーマとスケジュールを確認すること ・統計学と心理学実験の基礎知識を有すること ・PCは必須 ・PC上でのソフトウェア操作やプログラミングを行うことに十分留意すること ・履修人数および履修者の関心領域によって、扱う研究領域と担当回数が変わる場合があります
教科書 / 教材	<p>平井 明代 (著, 編集), 岡 秀亮 (著, 編集), 草薙、教育・心理系研究のためのRによるデータ分析 論文作成への理論と実践集、東京図書、2022年、4489023774</p> <p>実吉 綾子, 前原 吾朗, はじめよう実験心理学: MATLABとPsychtoolboxを使って、勤草書房、2015年、4326251069</p> <p>神田 英一郎, step by stepで学ぶ 論文を「読む」ための医療統計 - 文献の探し方から最新のベイズ統計・AI解析まで、メジカルビュー社、2022年、4758309698</p> <p>小杉考司 (著)、心理学データ解析基礎: RとJASPで学ぶ楽しい心理統計の世界、Independently published、2022年、979843051914</p> <p>田中 敏 (著), 中野 博幸 (著)、Rを使った 全自動 ベイズファクタ分析:js-STAR_XR+でかんたんベイズ仮説検定、北大路書房、2022年、4762831999</p> <p>田中 敏 (著)、Rを使った 全自動 統計データ分析ガイド: フリーソフトjs-STAR_XRの手引き、北大路書房、2021年、4762831484</p> <p>Jonathan Peirce (著) 他、Building Experiments in PsychoPy、SAGE Publications Ltd、2022年、1529741653</p> <p>眞嶋 良全 他、jamoviでトライ! 統計入門 フリーソフトウェアで始める科学データの分析、ナカニシヤ出版、2022年、4779515319</p> <p>小野寺 孝義 (著), 大藤 弘典 (著)、jamoviで学ぶ心理統計学、ナカニシヤ出版、2020年、4779515041</p> <p>菊野 雄一郎、心理学実験のためのMATLAB、工学社、2021年、4777521656</p>
参考文献	